

困り事／出来る事

住民同士でマッチング

豊田市旭地区の保育所だった建物を住民らがリノベーションして地域社会の支え合いの拠点「しきしまの家」とする木質DIY講座が20、21の両日開かれた。地元の大工2人が電ノコやエアコンプレッサ、釘打ちタッカーやレーザー水準器などの専用機材を持ち込み、住民らに指導しながら老朽化した平屋建て約150平方メートルの壁面すべてを地元産の間伐材を加工したヒノキ材に張り替える。住民の中にはインテリアや外構工事、電気工事業者などを営む専門業者も多く、愛知学泉大の学生や企業関係者らも加わり、2日間で延べ約50人が汗を流した。来春には木の香漂う新拠点がオープンし、2年後には喫茶店のない敷島自治区でここを拠点にカフェのオープンも夢が広がっている。

【柴田永治】

旭・敷島 壁面すべてヒノキ材に



住民みずからの手で支え合いの拠点づくりをとりよせ、リノベーションする参加者。豊田・杉本町の旧杉本保育所で。



リノベに使われたのは地元の「旭木の駅プロジェクト」が切り出したヒノキの間伐材。幅10センチ前後、厚さ13センチに加工された板の両端にはホゾとホゾ穴が噛み合うよう本実（ほんざね）加工が施されている。ところが板を次々に張り合わせていくと、壁のコーナー部分で幅が合わなくなる。板を切って幅を隙間に合わせると、今度はホゾの出っ張り部分で板が隙間に入

らない。

「こういう場合は、板を横から継がずに、下からホゾとかみ合わせながら入れてみて」。地元大工の松井幸生さん（74）と高山栄さん（71）の指導を受けながら、足場でタッカーを握る市職員の

「現場」の技。ベテラン大工には当たり前のことでも、周りを囲んだ人たちからはひとしきり感心する声があがった。

しきしまの家の拠点づくりは、2年前に過疎対策の全国的なモデルとして最高賞の総務大臣表彰を受けた敷島自治区（後藤哲義区長、330世帯）が、「次のステップに」と今年3月から検討を始めた。市が指定管理する敷島会館があるものの、地域特産の農産物が置けず、カフェも開けないなど、地域住民のニーズに答えるためには自由度が低かった。



しきしま支え合いプロジェクトで話し合うメンバー＝21年11月、敷島会館で（MYパワー提供）

市とつながる「関係人口」を増やしなから、住民同士が支え合う地域共同体中心の社会づくりを目指している。昨年3月には中学生以上の全住民930人を対象に約50項目のアンケートを実施。高齢者世帯が抱える草刈りや獣害対策、ちょっとした電気製品の修理などの困り事が浮き彫りになった。

同時に「お手伝いできる」ことも拾い出し、二つをうまくマッチングすれば地域課題の解決につながるかと考えたのが「支え合いプロジェクト」だった。プロジェクトリーダーの元教員板倉小夜子さん（68）は「コロナ禍で敷島各地区での説明会が開けなかったが、残る3カ所でも今月中に開くメドが付いた。走りながら準備だが、何とか支え合いの相談窓口となる『しきしまの家』を来年4月にはオープンしたい」と話す。

その手始めが、1971年に建てられ、老朽化した旧杉本保育所だった建物をリノベするDIY講座。今後は厨房を作ったりトイレを改修したりするなど本格工事に乗り出す。

地域課題を経営的な視点を持ちながら住民みずから解決する地域運営組織は、東海地区ではほとんど初の試み。組織も任意団体の自治区ではなく、会社組織のような責任を伴う法人を立ち上げる。事業資金は約750万円、住民の協賛金や企業寄付金、わくわく事業の市補助金のほか、10月にはクラウドファンディングも計画。敷島自治区では電力自由化に伴って設立された地域電力会社「三河の里山コミュニティパワー」（早川富博社長、略称・MYパワー）への切り替えが、すでに半数の世帯で進んでおり、収益は「しきしま

カフェや特産品も販売

「喫茶店一つない敷島地区だが、ずっとカフェをやりたいと思っていた。しきしまの家ができればここでじいちゃん、ばあちゃんも朝から気軽に寄れるカフェを開きたい」。そう話すのは成木由紀く、特産のミネアサヒを使ったおにぎりや、ミネアサヒの米粉を使ったドーナツを作りたい。地元産のお米のおいしさをたくさんの人に知ってほしい」と夢を膨らませる。

後藤区長は「関係人口とのつながりを大切に、地域のみんなが参加する敷島づくりを進めたい」と話している。

「家」を通じて住民が必要とする通院の送迎や配食サービスなどにも充てられる。